
う！！ <http://www.youtube.com/watch?v=fhHRWKd7jZo&feature=related>

イナリズーシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説NO 4410＝ししとう＝ししとう！！ ししとう＝ししとう！！
<http://www.youtube.com/watch?v=fhHRWKd7jZo&feature=related>

【コード】

N4410M

【作者名】

イナリズーシ

【あらすじ】

約200文字小説が微妙に繋がってる感があるので 新たに短編集を作る訳なのです。

キリストマザゴン物語（実話）

イエスが6歳の頃、病気で父親が死んだ。

それまでの治療で借金があった。

その際母は、借金取りに

「うへへその肉体をよせば借金を無かったことに・・・」

等と要求され

「イヤ〜〜〜」と拒み

住む家売って返済した。

そしてホームレスになりました。

母はイエスの手を引いて街を転々して物乞い生活を始めた。

人手が必要とされる場所を見つけては、手伝い食べ物分けて貰うという生活だ。

イエス9歳の時、母は別々に生きようと提案した。

2人より一人の方が物乞いされる側の負担が軽いからか、それとも手伝いにありつける確率が高いと判断したのだろうか。
いずれにせよ、母とイエスは別れて生きる事となった。

それから十数年後

イエスは偉くなっていた。

旅行く先々で人々の色んなもの見聞きした経験が役立ったのだ。

地方ごとの人の話題を沢山知る。

薬草にも詳しくなったり、サバイバルノウハウを身にする。

いつのまにか、便利屋的で癒しマスコトキャラで何でもイエスと言ってこなす様になった。

人々からしたわれて、中には政治家も彼を慕い彼に支援する事でう

まい具合に人々の人気に乗った。

一方その頃、母は
慰み物に・・・

そんなある日、イエスは母と再会した。

これが聖母マリアね。

イエスにとっては、頑張って裕福になれば母ともう一度暮らせるから、それだけを夢見て頑張ってた。

だが、もう直ぐイエスは貼り付けの刑だ。

政治の分野に足を踏み入れ様としていると勘違いした独裁者型の政治家は影でゴロツキを雇い、イエスを殺そうする。

けど、単にイエスだけを狙えば利害関係から、真っ先に政治家が犯人と判る。

なので捜査の目を攪乱するために、キリスト教崇拜の全ての人間を弾圧した。

決してキリスト個人のみを狙わない様な演出をしたのだ。

その政治家の正体は、十年前の借金取りだった。

肉体を拒まれた男の恨みは大きい。

逆恨みにイエスを亡き者にしたい気分が満々だ。

そんなこんなでイエスは捕まった。

貼り付けた。ここにコピーアンドペーストしてやるぜ！

寒いぜ！ ギャグじゃないよ。死ぬのが12月24日だから寒いのね。

そして肉体を拒まれた男は、イエスを助けにマリアが来てくれるのを期待してた。

だが、情報伝達の仕組みの無いこの時代。
まさか、イエスが貼り付けにされてるなんて、マリアは思いもよらない。

忙しく人々を笑顔にして地方を回りをしているのと思い込んでた。

反面、イエスは期待してた。

母さえ助けにきてくれれば助かったんじゃないかなと・・・
だから、死ぬ前に、「やっぱり俺捨てられたのかな？」
と発言した。

母と別れたのは9歳ですから自分は重荷で捨てられた勘違いしたのでしょう。

子供なんて物事を大げさに斜め45度くらいに考えるから仕方がないです。

だから親に捨てられるという恐怖トラウマがありました。

イエスファンはその言葉を「ああ、なぜ神は見捨てになさったのか・・・」

と、勘違いしました。

そして、そもそもイエスは神なんぞ信じてません。
神が居るなら父親を病から救ってくれた筈ですので・・・

キリストマザコン物語（実話）（後書き）

イエスの誕生日はクリスマスイブという説があるが、これは間違いで本当は死んだ日です。

マリアが「イエスは死しても皆の心に生きるよ」とか名言したから人々の心に強く残りました。

この日を大きなイベントとして大げさな事してる内に名言を忘れられて、いつのまにか誕生日だと思われる様になりました。

そもそも誕生日なんて大人になったら誰も祝ってくれませんからね！
皆、覚えてる筈、無いのです！！

お勧めしない方が良い理論（エッセイ）

例えば自分の好きな漫画や小説を人に勧めて読ませると、それだけで期待度とハードルが上がってしまい、本来意図した感動が与えられなくなる。

自分の事例を当てはめて申し訳ないけれど、自分で探して偶発的に得られた掘り出し物だからこそ、感動が跳ね上がる気がするののは気のせいだろうか？

そんな風に考えてしまうからこそ、レビューで良い事を書くのは本当は良くないと思うのである。

最善の方法は作者さんと仲良くなり了解を取った上で貶して人格を罵倒するのが良い。そうすれば「こんなに貶されて作者さん可愛そう……そんなに悪い文章なのか？」とか「他人をこんなにも罵倒する人間の方が神経が疑う。そういう人が読む物は気なる……」みたいな感じで読まれる可能性がある。

不特定多数向けに対しては罵倒するが良いと断言したとしても、親しい友人に何度もお勧めする場合は、どうすべきだろうか？ 同じ手口で何度も勧めても見切られてしまう。小説興味ない友人ならば読ませるのは、とても至難の業である。つまり、何度も、お勧めする場合は、当然その都度、手法を変える事が必要となる。

その為に出来る方法を ちょっと考えてみる。

？嘘で塗り固める。

例えば友人に

「オレ……最近小説書き始めたんだよ」

「へー！ そうなんだ。ちょっとくら見せてよ」

？友人宅のポストに投函する。

？普通に勧める。

？友人の趣味を否定しまくりケンカして別れる。その際に、さり気なく忘れ物として置いて来る。

？友人宅を放火する。

最後に、なぜ、ここまでして趣味の合わない友人を自分の趣味色に染め上げようとするのかギモンに思うかもしれない。
それは当然………が良いからに決まっている。

お勧めしない方が良い理論（エッセイ）（後書き）

お勧め最大の問題点は勧められた側が面白くないと感じているのに関わらず読み進めてしまう事にある。

勧める側が読んで感情移入できた読歩数みたいなのを目安として、どこで読みを打ち切るかを決めると宜しいよね。

特に小説に限っては漫画と比べると絵という客観的指標がない分、脳内の読解フローが読者ごとに大きく枝分かれする傾向にあると感じる。

小説を人に勧めるのは無駄になる可能性が極めて高い。

死痛苦開始パターンA

死死死死死死死死死死死死死死死死死死
苦痛死死死死死死死死死死死死死死死死
亡死死死死悲シシシ夜死死死血死刺死
燃死死死死シシシッ死死死死シ死死死

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓がなる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて
静かに終えた。

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

彼岸花に口づけを。

黒赤のバラに思いを乗せる。

この上記の文字配列を見てしまった人間は当日中に死にます。
プリントアウトした文字でも手書きの文字でも、この文字列を見るだけで人が死にます。

死因は呼吸困難の一種であり喉を掻き毟りながら苦痛の中で死んでいきます。

ですが助かる方法が一つだけあります。

方法は、この文字列を沢山の人間に見せる事です。

この死のルールは一日に死ぬ人間は一人までであり、見た人間の中からランダムに選ばれます。

沢山の人間に見せるほど、今日、自分が死ぬ確率が小さくなります。
100人が、これを読めば、最大で100日は生きられるでしょう。

運が良ければですが……

私がこの文字列を知ってしまったのは友人からです。

友人は小学生で6日前に、この文字列が書かれた紙切れを道端で拾いました。

それを学校へ持って行き、クラスメイト6人に見せたその瞬間、
一人が死んでしまいました。

その後、一日一人と見せた相手が死んでしまい、友人は怖くなり
私に相談してきました。

その際、私は推理して実験する過程で、この死のルールを仮説と
しました。

その実験と検証の為、そして自分が生き残る為、今こうして公開
しています。

私の友人のA君もこれで死にました。
怖いです。次は私の番かも知れません。

私は死にたくありませんので、皆さんで広めてください。

――――
上記はネットの掲示板に書かれていた内容とする。

「あははは！ 今時、こんなくだらな。ちょっとこれ見てみ！」
「なに？」

私は友人の里中の家で漫画を読んでいたのをネットを見ていた里中に邪魔された。

ネットの掲示板（上記）にて、怪しい文章を見て、ゲラゲラ笑う友人。

その友人は翌日死んだ。

死因は原因不明の呼吸困難で、首を掻き筆り血まみれであつたらしい。

私は、思い出した様に昨日見た文章を確認。

もし、本当だとしたら凄く怖い。

半信半疑だが、つい信用して私も掲示板に乗っていた文章を広めた。だけど、それだけでは不安は解消されず、居ても経つていられない私は、ネットでこの文章について調べ始めた。

すると中国園でのヒットがやけに多かった。

良く似た文字とその配列はこれにソックリだった。

中国語で書かれているが概ね意味も同じだ。

投稿者の体験談には、同じような事ががらが書いてあった。

死亡事例についても調べたが日本語、中国園、そのどちらにも何もヒットしない。

「くだらないな・・・どうせ偶然だ。」

私は思い過ごしだと思い、日々の生活に戻た。

その一カ月後

全ては真実だと判った。

事件と噂は日本中に飛び交っていた。

マスコミやメディアでも『死痛苦』は報道され、もはや日本人で知る者は居ないというレベルまで広まった。

しかし、そこで疑問が一つ残った。

中国側においては、日本で事が起きる以前にマスコミを通す程の広まりは無かった。

中国で死者が出ているという情報は一切聞かない。
日本国内においてのみ死者が現れている。

私は、この瞬間物語の真実が判った。

この事を知らせる為、警察へと掛けもうとして玄関口の扉を開けた
その時――

――私は死んだ

く後書きく

この物語の続きが読みたい人は「約200文字小説」の項目『つづき』以降の物語を読めば話が続いています。

死痛苦開始パターンB

少女は普段からクラスメイトに虐められている。

今日も学校行くのが憂鬱。

学校行く途中で紙切れを拾った。

紙切れはプリントアウトした様なゴシック体文字列が配列してあった。

以下紙の内容

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死

苦痛死死死死シ死死絶死死無死死

亡死死死悲シシシ夜死死死血死刺死

燃死死死死シシシッ死死死死シ死死死

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓になる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて静かに終えた。

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4
1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3
1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

彼岸花に口づけを。

黒赤のバラに思いを乗せる。

その紙を拾い学校へと持っていくと、いじめっ子3人に取り上げられた。

回し読みされる。

「なにこれー！ 変なの」

と、その瞬間、一人が苦しみだして呼吸困難に陥り死んだ。

怖い、皆驚いた。

クラスは大変ムード。貴方はそうでもないムード。

苦しむ死人を目の前に見た少女はその夜眠れない。

次の日から、いじめっ子達が毎日一人のペースで死んだ。

皆ビツくり。作者もビツくり。警察とかもビツくり

一番ビツクリなのは少女

少女は考えた。

（あの変な紙を皆に見たから死んだののかな？ 悪い人間を呪いで殺しちゃうのかな？）

いじめっ子が居なくなって嬉しい反面気味悪い。

友達に相談して見せてみた。

すると、後日、友達が一人が死んだ。

「な、なんで！」

訳が判らない少女。

少女はインターネットで自分の体験した事を掲示板に書いて不特定多数に相談に乗って貰った。

すると、その文面を見せて欲しいという要望があり書き込んだ。

それを読んだ者から、いくつか返事があった。

（投稿者 名無しのごんべい）

もしかして、ネット越しで文字列見るだけで呪いが機能したりしてw

（返事）怖いこと書かないでください。

（投稿者 樋上）

この文章が本当か嘘かにしろ、ふざけた真似はやめて下さい。先日、私の息子が死にました。遺品を整理していてパソコンを見つけて、息子が生前どんなサイトを見ていたか調べていたらここに辿りつきました。息子は呼吸困難で死んでしまいました。

（返事）ギャグ……ですよね？

（投稿者 IS）

読み物として面白いギャグですね。上記二人の言い分が事実だと仮定した場合は、呪いかもしれませんね。

貴方だけが死なないという事ですし、その可能性が高いです。

しかもネット越しでも機能するなんて凄く怖いです（笑）

（返事）

呪いなんて、そんなの信じたくない。

↓返事の投稿して5日後↓

少女は死んだ。

（投稿者 G）

試しに呪いかどうかを私の方で試しました。適当な知り合いに10人くらいにメールで送ったら死にました。毎日、一人ペースで死にました。

でも、5日目で、死人が出ませんでした。

（投稿者 IS）

スレ主さんからの返事がありませんね。もしかして死んだのかな（笑）

もし、死んでてGさんの話が本当なら死の現象は

”その字を見た人が無条件でランダムで死ぬ”

という事になるのかね？ だったら俺も死ぬなww

「あははは！ 今時、こんなのだらな。ちょっとこれ見てみ！」
「なに？」

私は友人の里中の家で漫画を読んでいたのをネットの掲示板を見ていた里中に邪魔された。

ネットの掲示板にて、怪しい文章を見て、ゲラゲラ笑う友人。

その友人は翌日死んだ。

死因は原因不明の呼吸困難で、首を掻き衄り血まみれであつたらしい。

私は、思い出した様に昨日見た文章を確認。

もし、本当だとしたら凄く怖い。

半信半疑だが、つい信用して私も掲示板に乗っていた文章を広めた。だけど、それだけでは不安は解消されず、居ても経つていられない私は、ネットでこの文章について調べ始めた。

すると中国園でのヒットがやけに多かった。

良く似た文字とその配列はこれにソックリだった。

中国語で書かれているが概ね意味も同じだ。

投稿者の体験談には、同じような事ががらが書いてあつた。

死亡事例についても調べたが日本語、中国園、そのどちらにも何もヒットしない。

「くだらないな・・・どうせ偶然だ。」

私は思い過ぎだと思い、日々の生活に戻た。

その一カ月後

全ては真実だと判つた。

事件と噂は日本中に飛び交っていた。

マスコミやメディアでも『死痛苦』は報道され、もはや日本人で知

る者は居ないというレベルまで広まった。

しかし、そこで疑問が一つ残った。

中国側においては、日本で事が起きる以前にマスクミを通す程の広まりは無かった。

中国で死者が出ているという情報は一切聞かない。

日本国内においてのみ死者が現れている。

私は、この瞬間物語の真実が判った。

この事を知らせる為、警察へと掛けもつとして玄関口の扉を開けた
その時――

――私は死んだ

死痛苦開始パターンB（後書き）

この物語の続きが読みたい人は「約200文字小説」の項目「つつき」以降の物語を読めば話が続いています。

死痛苦開始パターンC

死死死死死死死死死死死死死死死死
苦痛死死死死死死死死死死死死死死
亡死死死死悲シシシ夜死死死血死刺死
燃死死死死シシシッ死死死死死死死死

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓がなる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて
静かに終えた。

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

彼岸花に口づけを。

黒赤のバラに思いを乗せる。

< > < > < > < >

暗い部屋で何かと会話している風な少年は一人机に向かって上記の文章を紙に書いた。

ある日、いじめっ子6人が、少年が持っていた紙切れ（さっきの文章）を奪い取り回し見る。

その直後、いじめっ子の一人が首を血が出るまでかきむしり絶叫しながら死んだ。

その隙に紙切れを取り返し、そして笑みを浮かべる少年

その日を境に、いじめっ子達が一人、また一人と死んでいく。

「呪いの力だよ」

少年は、死んだ子の葬式の際にて、いじめっ子の人の一人に宣告する。

「次は誰の番かな？」

いじめっ子の一人は恐怖して、残された3人と相談する。

3人は少年に助けを求めた。

だが、聞き入れて貰えない。

「僕を虐めた罰だ。死んで罪を償え」

翌日、また一人が死んだ。

残り2人は、周りの大人達に相談したが、半信半疑で信用してもらえない。それよりも人を虐めた事を叱られる。

友人たちのいくつかは、それを聞き怖くなり、少年に近寄らなくなる。

先生も気味が悪くて目を合わせない。

少年が話しかけても避ける。

（その日の放課後）

苛めっ子の一人が死ぬ事を恐怖して包丁を取り出し少年を殺すと脅した。

「別にいいよ。僕が死ねばこの呪いは無敵になる」

少年はそう言いつて相手にせず立ち去る。

その夜にて、少年は深夜の教室の黒板に向かう。

（翌日）

死の時間が迫る事に恐怖してた苛めっ子は、授業中も落ち着かず包丁を机の中に隠し少年を殺そうか葛藤している。

だが、人前で殺せる筈も無く

少年を殺すために、学校帰りのを少年の自宅付近で待ち伏せしていた。

が、もう一人の苛めっ子が少年宅を訪問しに来て少年を刺し殺した。生き残った最後の苛めっ子は、その場を逃げる様に自宅へと帰る。

深夜、少年を刺し殺した友達がどうなったのか、電話で確認してみ

ると、親御さん泣き状態。死んだらしい。

（翌朝）

彼は恐怖していた。少年を殺しても無意味。寧ろのろいを掛けた本人が死ぬからこそ呪いを解除できない。

最後に死ぬのは自分と、完全に絶望したまま、布団の中に潜り込んで怯えている。

（その同時刻学校にて）

登校してくる一人の少年。

黒板に壁に書かれた字列（冒頭の文字列）を見つける。

その後、もう一人の少女が、それを見る。

「日直、黒板消しとけよ」

書かれた文字は少年に消される。

消される前に何気なく携帯で写真を撮る少女
後に少女はネット上の日記サイトに掲載した。
そしてその読者が一人、その日に死んだ。

時は流れ

ある日、ネットで『死痛苦』という名の噂が広まっていた。

以下の文字列を見たら、当日中に死んでしまうという噂である

[illegible]

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓になる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロデーは音を変え、激しく燃えて静かに終えた。

4
4
4
4
4
4
4
4
4
4
4
4
4
4
4

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3

彼岸花に口づけを。

黒赤のバラに思いを乗せる。

—————

この上記の文字配列を見てしまった人間は当日中に死にます。
プリントアウトした文字でも手書きの文字でも、この文字列を見

るだけで人が死にます。

死因は呼吸困難の一種であり喉を掻き毟りながら苦痛の中で死んでいきます。

ですが助かる方法が一つだけあります。

方法は、この文字列を沢山の人間に見せる事です。

この死のルールは一日に死ぬ人間は一人までであり、見た人間の中からランダムに選ばれます。

沢山の人間に見せるほど、今日、自分が死ぬ確率が小さくなります。100人が、これを読めば、最大で100日は生きられるでしょう。

運が良ければですが……

私がこの文字列を知ってしまったのは友人からです。

友人は小学生で6日前に、この文字列が書かれた紙切れを道端で拾いました。

それを学校へ持って行き、クラスメイト6人に見せたその瞬間、一人が死んでしまいました。

その後、一日一人と見せた相手が死んでしまい、友人は怖くなり私に相談してきました。

その際、私は推理して実験する過程で、この死のルールを仮説としました。

その実験と検証の為、そして自分が生き残る為、今こうして公開しています。

私の友人のA君もこれで死にました。

怖いです。次は私の番かも知れません。

私は死にたくありませんので、皆さんで広めてください。

——だつてさ、あははは！ 今時、こんなのだらな。ちょっとこれ見てみ！」

「なに？」

私は友人の里中の家で漫画を読んでいたのをネットを見ていた里中に邪魔された。
ネットの掲示板にて、怪しい文章を見て、ゲラゲラ笑う友人。その友人が翌日死んだ。

死因は原因不明の呼吸困難で、首を掻き筆り血まみれであつたらしい。

私は、思い出した様に昨日見た文章を確認。
もし、本当だとしたら凄く怖い。

半信半疑だが、つい信用して私も掲示板に乗っていた文章を広めた。だけど、それだけでは不安は解消されず、居ても経つていられない私は、ネットでこの文章について調べ始めた。

すると中国園でのヒットがやけに多かった。

良く似た文字とその配列はこれにソックリだった。

中国語で書かれているが概ね意味も同じだ。

投稿者の体験談には、同じような事ががらが書いてあった。

死亡事例についても調べたが日本語、中国園、そのどちらにも何もヒットしない。

「くだらないな・・・どうせ偶然だ。」

私は思い過ごしだと思い、日々の生活に戻た。

その一カ月後

全ては真実だと判った。

事件と噂は日本中に飛び交っていた。

マスコミやメディアでも『死痛苦』は報道され、もはや日本人で知る者は居ないというレベルまで広まった。

しかし、そこで疑問が一つ残った。

中国側においては、日本で事が起きる以前にマスコミを通す程の広まりは無かった。

中国で死者が出ているという情報は一切聞かない。
日本国内においてのみ死者が現れている。

私は、この瞬間物語の真実が判った。

この事を知らせる為、警察へと掛けもうとして玄関口の扉を開けた
その時――

――私は死んだ

死痛苦開始パターンC（後書き）

この物語の続きが読みたい人は「約200文字小説」の項目「つづき」以降の物語を読めば話が続いています。

死痛苦開始パターンD

少女は普段からクラスメイトに虐められている。

今日も学校行くのが憂鬱。

学校行く途中で紙切れを拾った。

紙切れはプリントアウトした様なゴシック体文字列が配列してあった。

以下紙の内容

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死

苦痛死死死死シ死死絶死死無死死

亡死死死悲シシシ夜死死死血死刺死

燃死死死死シシシッ死死死死シ死死死

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓になる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて静かに終えた。

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4
1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3
1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

彼岸花に口づけを。

黒赤のバラに思いを乗せる。

その紙を拾い学校へと持っていくと、いじめっ子3人に取り上げられた。

回し読みされる。

「なにこれー！ 変なの」

と、その瞬間、一人が苦しみだして呼吸困難に陥り死んだ。

怖い、皆驚いた。

クラスは大変ムード。貴方はそうでもないムード。

苦しむ死人を目の前に見た少女はその夜眠れない。

次の日から、いじめっ子達が毎日一人のペースで死んだ。

皆ビツくり。作者もビツくり。警察とかもビツくり

一番ビツクリなのは少女

少女は考えた。

（あの変な紙を皆に見たから死んだののかな？ 悪い人間を呪いで殺しちゃうのかな？）

いじめっ子が居なくなつて嬉しい反面気味悪い。

友達に相談して見せてみた。

すると、後日、友達が一人が死んだ。

「な、なんで！」

訳が判らない少女。

少女はインターネットで自分の体験した事を掲示板に書いて不特定多数に相談に乗って貰った。

すると、その文面を見せて欲しいという要望があり書き込んだ。

それを読んだ者から、いくつか返事があった。

（投稿者 名無しのごんべい）

もしかして、ネット越しで文字列見るだけで呪いが機能したりしてw

（返事）怖いこと書かないください。

（投稿者 樋上）

この文章が本当か嘘かにしろ、ふざけた真似はやめて下さい。先日、私の息子が死にました。遺品を整理していてパソコンを見つけて、息子が生前どんなサイトを見ていたか調べていたらここに辿りつきました。息子は呼吸困難で死んでしまいました。

（返事）ギャグ……ですよね？

（投稿者 IS）

読み物として面白いギャグですね。上記二人の言い分が事実だと仮定した場合は、呪いかもしれませんね。

貴方だけが死なないという事ですし、その可能性が高いです。

しかもネット越しでも機能するなんて凄く怖いです（笑）

（返事）

呪いなんて、そんなの信じたくない。

↓返事の投稿して5日後↓

少女は死んだ。

（投稿者 G）

試しに呪いかどうかを私の方で試しました。適当な知り合いに10人くらいにメールで送ったら死にました。毎日、一人ペースで死にました。

でも、5日目で、死人が出ませんでした。

（投稿者 IS）

スレ主さんからの返事がありませんね。もしかして死んだのかな（笑）

もし、死んでてGさんの話が本当なら死の現象は

”その字を見た人が無条件でランダムで死ぬ”

という事になるのかね？ だったら俺も死ぬなww

という上記のやりとりの掲示板を見つけた私は怖くなった。

事件とかニュースにも成っていないし所詮作り話だと思う。
でも

なんとなく、そのオカルト話を信じてしまい、私もソレをネットに
投稿して噂を広めた。

その際、色々物思いにふけりました。

人が死ぬ文章を投稿する事によって起きる死の罪は誰にあるのだろ
うか？とか

死ぬと判っていて人に、それを見せるのだから殺意があるのと同じ
意味では無かるうかとか。

仮に罪を肯定しても裁判になりえるのか？とか

法律では神、霊的現象の事件は責任の所在は何処にも無いとはつき
りと明記されているし・・・

仮に法律がそうであっても、死んだ人の遺族は裁判を起こすのだろ
うか。

駄目と判っていてもやる事なんて、他にないだろうし・・・

私は、そんな事を考えながらモニターを凝視していた。

そして ふと思った。

私と同じ事してる人ってどのくらい居るかな。

とりあえず文字列にある『苦痛死』という単語で検索したら以下
の情報が出た

『苦痛死』で、まず目に飛び込んで来たのが二酸化炭素による苦
痛死だった。

保健所に送られる野良猫や野良犬は最終的に引き取り手が無い場

合、炭酸ガスによって窒息死させられる。

安楽死が愛護団体から求められるが、処分施設の従業員の命の安全を考慮して、その他のガスは使えないらしい。

また、個別に安楽させる場合、注射、薬剤が必要になり、コストが掛かる様だ。

子猫一匹約35円、大人の猫で500円というレベルらしい。

あいやゝビックしたよゝ

更に深層部を調べてたら

小説投稿サイト「なつちやおう」が出てきた。

物語書くとしたらどんなの書くなゝゝゝ

いつちよ、これを題材に小説を考えてみた。

まず、この連続死が真実になって世界中に広まると仮定する。

主人公は謎を求めて、怪文章の研究をし始める。

その結果、文章の配列から同じようにさっきの私と同じ様に検索するよね。

そんで・・・

以下の様な展開になるのか？

……小説………

苦痛死のキーワードでは、特に目に留まるものはなかった。

主人公は、この字の羅列をしばらく凝視していたら、『亡死』に注意が向いた。

逆から読めば死亡であるのだが、この文字配列は中央にシを起点にして、左へも右へも読める様になっている。

試しに苦痛死を右から左へと読んで『死痛苦』というキーワードで検索をした。

調べると中国園でのヒット率がやけに多く、読解が難しい。

ネット辞書の中国語翻訳で、『死んでも苦痛』という意味だったが、特に、意味があるとは思えない。

それから主人公は何気なく中国語サイトをブラウングしていた。

と、その時、主人公の興奮は頂点に達した。

見つけてしまった。

全くこれと同じ文字列が其処にあった。

主人公は重点的にその文字列の周辺の翻訳に勤めていたら、投稿者と連絡を取れる可能性があるのに気づいた。

素人レベルの勉強をして、つたないカタコトの翻訳でコンタクトを取った。

相手からの返信を読解して判ったのが、中国では半年以上前からこれと同じ文字列が広まっでいて、『死痛苦』という呼び名がついているらしい。

そしてその『死痛苦』に関わり、死んでいった人が沢山居るらしく、主人公の仮説通りの話だった。

主人公は、そのとき恐怖した。心のどこかで単なる偶然だと思いたかったのだ。

そう思えばメル友が死んだのは自分の責任では無くなるからね。だが、まだ大丈夫だと思う。一時、冷静さを失った主人公だが、まだ、偶然の一致という可能性も残されていると思った。

中国で『死痛苦』を投稿している彼は狂言者かもしれないし、主人公の語力では真実まではやはり判らない。
主人公はとにかく事が起きるか時間を待つことにした。
というより、それしか出来なかったのだ。

.....

こんな感じで1話はOKかな

そして約1カ月後

全てはマジで真実だと判った。

おどろいた

事件と噂は日本中に広まった。

マスコミやメディアでも『死痛苦』は報道され、もはや日本人で知る者は居ないというレベルまで広まった。

しかし、そこで疑問が一つ残った。

中国側においては、日本で事が起きる以前にマスコミを通す程の広まりは無かった。

中国で死者が出ているという情報は一切聞かない。

日本国内においてのみ死者が現れていた。

突然ですが私は、この瞬間物語の真実が判った。

この事を知らせる為、警察へと掛けもうとして玄関口の扉を開けた
その時――

――私は死んだ

）後書き）

この物語の続きが読みたい人は「約200文字小説」の項目「つづき」以降の物語を読めば話が続いています。

死痛苦開始パターンE

死死死死死死死死死死死死死死死死死死
苦痛死死死死死死死死死死死死死死死死
亡死死死死悲シシシ夜死死死死血死刺死
燃死死死死シシシッ死死死死シ死死死

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓がなる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて
静かに終えた。

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4
1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 3
1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 3

彼岸花に口づけを。

黒赤のバラに思いを乗せる。

< > < > < > < >

暗い部屋で何かと会話している風な少年は一人机に向かって上記の文章を紙に書いた。

ある日、いじめっ子6人が、少年が持っていた紙切れ（さっきの文章）を奪い取り回し見る。

その直後、いじめっ子の一人が首を血が出るまでかきむしり絶叫しながら死んだ。

その隙に紙切れを取り返し、そして笑みを浮かべる少年

その日を境に、いじめっ子達が一人、また一人と死んでいく。

「呪いの力だよ」

少年は、死んだ子の葬式の間にて、いじめっ子の人の一人に宣告する。

「次は誰の番かな？」

いじめっ子の一人は恐怖して、残された3人と相談する。

3人は少年に助けを求めた。

だが、聞き入れて貰えない。

「僕を虐めた罰だ。死んで罪を償え」

翌日、また一人が死んだ。

残り2人は、周りの大人達に相談したが、半信半疑で信用してもらえない。それよりも人を虐めた事を叱られる。

友人たちのいくつかは、それを聞き怖くなり、少年に近寄らなくなる。

先生も気味が悪くて目を合わせない。

少年が話しかけても避ける。

（その日の放課後）

苛めっ子の一人が死ぬ事を恐怖して包丁を取り出し少年を殺すと脅した。

「別にいいよ。僕が死ねばこの呪いは無敵になる」
少年はそう言いつて相手にせず立ち去る。

その夜にて、少年は深夜の教室の黒板に向かう。

（翌日）

死の時間が迫る事に恐怖してた苛めっ子は、授業中も落ち着かず包丁を机の中に隠し少年を殺そうか葛藤している。

だが、人前で殺せる筈も無く

少年を殺すために、学校帰りのを少年の自宅付近で待ち伏せしていた。

が、もう一人の苛めっ子が少年宅を訪問しに来て少年を刺し殺した。生き残った最後の苛めっ子は、その場を逃げる様に自宅へと帰る。

深夜、少年を刺し殺した友達がどうなったのか、電話で確認してみ

ると、親御さん泣き状態。死んだらしい。

（翌朝）

彼は恐怖していた。少年を殺しても無意味。寧ろのろいを掛けた本人が死ぬからこそ呪いを解除できない。

最後に死ぬのは自分と、完全に絶望したまま、布団の中に潜り込んで怯えている。

（その同時刻学校にて）

登校してくる一人の少年。

黒板に壁に書かれた字列（冒頭の文字列）を見つける。

その後、もう一人の少女が、それを見る。

「日直、黒板消しとけよ」

書かれた文字は少年に消される。

消される前に何気なく携帯で写真を撮る少女
後に少女はネット上の日記サイトに掲載した。
そしてその読者が一人、その日に死んだ。

時は流れ

ある日、ネットで『死痛苦』という名の噂が広まっていた。

以下の文字列を見たら、当日中に死んでしまうという噂である

[illegible]

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓になる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて静かに終えた。

[illegible]

1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3

1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3
1
3

彼岸花に口づけを。

黒赤のバラに思いを乗せる。

この上記の文字配列を見てしまった人間は当日中に死にます。

るだけで人が死にます。

死因は呼吸困難の一種であり喉を掻き毟りながら苦痛の中で死んでいきます。

ですが助かる方法が一つだけあります。

方法は、この文字列を沢山の人間に見せる事です。

この死のルールは一日に死ぬ人間は一人までであり、見た人間の中からランダムに選ばれます。

沢山の人間に見せるほど、今日、自分が死ぬ確率が小さくなります。100人が、これを読めば、最大で100日は生きられるでしょう。

運が良ければですが……

私がこの文字列を知ってしまったのは友人からです。

友人は小学生で6日前に、この文字列が書かれた紙切れを道端で拾いました。

それを学校へ持って行き、クラスメイト6人に見せたその瞬間、一人が死んでしまいました。

その後、一日一人と見せた相手が死んでしまい、友人は怖くなり私に相談してきました。

その際、私は推理して実験する過程で、この死のルールを仮説としました。

その実験と検証の為、そして自分が生き残る為、今こうして公開しています。

私の友人のA君もこれで死にました。

怖いです。次は私の番かも知れません。

私は死にたくありませんので、皆さんで広めてください。

――――

という上記が書かれた掲示板を見つけた私は怖くなった。事件とかニュースにも成っていないし所詮作り話だと思う。でも

なんとなく、そのオカルト話を信じてしまい、私もソレをネットに投稿して噂を広めた。

その際、色々物思いにふけた。

人が死ぬ文章を投稿する事によって起きる死の罪は誰にあるのだろうか？とか

死ぬと判っていて人に、それを見せるのだから殺意があるのと同じ意味では無かるうかとか。

仮に罪を肯定しても裁判になりえるのか？とか

法律では神、霊的現象の事件は責任の所在は何処にも無いとはつきりと明記されているし・・・

仮に法律がそうであっても、死んだ人の遺族は裁判を起こすのだろうか。

駄目と判っていてもやる事なんて、他にないだろうし・・・

私は、そんな事を考えながらモニターを凝視していた。

そして ふと思った。

私と同じ事してる人ってどのくらい居るかな。

とりあえず文字列にある『苦痛死』という単語で検索したら以下の情報が出た

『苦痛死』で、まず目に飛び込んで来たのが二酸化炭素による苦

痛死だった。

保健所に送られる野良猫や野良犬は最終的に引き取り手が無い場合、炭酸ガスによって窒息死させられる。

安楽死が愛護団体から求められるが、処分施設の従業員の命の安全を考慮して、その他のガスは使えないらしい。

また、個別に安楽させる場合、注射、薬剤が必要になり、コストが掛かる様だ。

子猫一匹約35円、大人の猫で500円というレベルらしい。

あいや〜ビツクしたよ〜

更に深層部を調べてたら

小説投稿サイト「なつちやおう」が出てきた。

物語書くとしたらどんなの書くな〜

いっちょ、これを題材に小説を考えてみた。

まず、この連続死が真実になって世界中に広まると仮定する。

主人公は謎を求めて、怪文章の研究をし始める。

その結果、文章の配列から同じようにさっきの私と同じ様に検索するよね。

そんで・・・

以下の様な展開になるのか？

……小説……

苦痛死のキーワードでは、特に目に留まるものはなかった。

主人公は、この字の羅列をしばらく凝視していたら、『亡死』に注意が向いた。

逆から読めば死亡であるのだが、この文字配列は中央にシを起点にして、左へも右へも読める様になっている。

試しに苦痛死を右から左へと読んで『死痛苦』というキーワードで検索をした。

調べると中国園でのヒット率がやけに多く、読解が難しい。

ネット辞書の中国語翻訳で、『死んでも苦痛』という意味だったが、特に、意味があるとは思えない。

それから主人公は何気なく中国語サイトをブラウングしていた。と、その時、主人公の興奮は頂点に達した。

見つけてしまった。

全くこれと同じ文字列が其処にあった。

主人公は重点的にその文字列の周辺の翻訳に勤めていたら、投稿者と連絡を取れる可能性があるのに気づいた。

素人レベルの勉強をして、つたないカタコトの翻訳でコンタクトを取った。

相手からの返信を読解して判ったのが、中国では半年以上前からこれと同じ文字列が広まっていて、『死痛苦』という呼び名がついているらしい。

そしてその『死痛苦』に関わり、死んでいった人が沢山居るらしく、主人公の仮説通りの話だった。

主人公は、そのとき恐怖した。心のどこかで単なる偶然だと思いたかったのだ。

そう思えばメル友が死んだのは自分の責任では無くなるからね。

だが、まだ大丈夫だと思う。一時、冷静さを失った主人公だが、まだ、偶然の一致という可能性も残されていると思った。
中国で『死痛苦』を投稿している彼は狂言者かもしれないし、主人公の語力では真実まではやはり判らない。
主人公はとにかく事が起きるか時間を待つことにした。
というより、それしか出来なかったのだ。

……小説終り……

こんな感じで1話はOKかな

そして約1カ月後

全てはマジで真実だと判った。

おどろいた

事件と噂は日本中に広まった。

マスコミやメディアでも『死痛苦』は報道され、もはや日本人で知る者は居ないというレベルまで広まった。

しかし、そこで疑問が一つ残った。

中国側においては、日本で事が起きる以前にマスコミを通す程の広まりは無かった。

中国で死者が出ているという情報は一切聞かない。
日本国内においてのみ死者が現れていた。

突然ですが私は、この瞬間物語の真実が判った。

この事を知らせる為、警察へと掛けもうとして玄関口の扉を開けた
その時――

——私は死んだ

く後書きく

この物語の続きが読みたい人は「約200文字小説」の項目『つつき』以降の物語を読めば話が続いています。

推理ゲーム

あなたは今この瞬間から現実世界と切り離されました。
この現実離れた世界では刻一刻と時間が流れます。

あなたは今、新たな世界の入り口で立ち止まっています。

前に進み、何かを知りたいと思うならこの先へ進んでください。

・
・
・

私の感情に流れ込んでくるその感覚は『死』である。

死の感覚など死なないと判らない筈だが、わたしは確かに死という
感覚を認識していた。

そして、ここが天国であることも・・・

なぜだろう？

私は先に進んだ。

先に進めば答えが見つかる気がしたのかもしれない。

人がいた。テーブルに座って何かをしている。

だが、それは肉眼で見えるわけじゃなかった。

目の前に人が居るという事。感じる感覚が流れ込んでくるだけだ。

目の前の人は一生懸命、仕事をしている。

なぜ、仕事だと決め付けたのかは判らない。ただ、その感覚もこれ
までと同じように感情に流れ込んできた。

人は言った。

「あ~~~~だるい。疲れたもう止めたい~~~~」

何を止めたいのだろうか。

「そりゃもちろん、仕事だよ」

仕事って何だろうか。

「これだよ。見て判るだろう」

私が見たものは金色の形をした歯車だ。

肉眼では、どのような工程で作られているのかは理解できないが、そいつの仕事から生み出されているとしか説明できない。

何に使う歯車だろうか。

「そりゃ、乗り物だよ。船だよ。金でぴかぴかの船だ。」
どうしてそんなものを・・・

「そりゃ、神様が乗るために決まっているだろう。馬鹿かお前」

男は、怒りつつも仕事をしている。

この一連の仕事人との対話は、まるでテレパシーをするように行われた。

わたしは、疑問だらけであり、仕事人に沢山質問をした。一番の疑問は、仕事人が私に対する疑問を一切持っていなかったことだ。

だが、その疑問についても仕事人は回答してくれた。

「僕たちには考える感情が無いんだ。いや、あるにはあるけど、

その感情は、『退屈』と『しんどい』と『仕事をやめられない』だけなんだ。

退屈だから他にやることなく仕事をする・・・
どうしてそうなるのかは判らないが僕らには希望という感情もある。

この仕事が認められた時、人間になることができる。
ただ、いつ終わるのかは全く判らないんだ」

これ以上の情報は仕事人からは得られなかった。
仕事人は相変わらず苦痛を感じながら仕事を続ける。

先へ進むと同じような仕事人は沢山居た。
彼らから得られる情報も全て仕事人と同じものだった。

さらに、前へ進むと、宮殿の様なものが現れた。
そこには神の船と思われる黄金の船がある。他は行き止まりだった。
私はその神の船に乗り、神を見たい好奇心に駆られると
船は自動で動き出し、はるか上空へ昇った。

空だと感じたのは、ほんの2、3分だろうか・・・
私を感じる事ができたのは、ただ空を上る感覚。
ここでも実際に空を肉眼で認識することはできない。
それどころか何かを見たという記憶は無かった。

ここに来るまで視覚的に見えていたものは全て思い込みだったのだ
ろうか？

私は神へと近づいているのを感じた。
神は目の前に現れた。

ここに着いたときには、全ての五感が機能してないのを確信してい

た。

それでも神だと理解した。

神は私に言った。

「君は、大きな仕組みの歪^{エラー}に巻き込まれてしまった。

神にも、なぜ、歪^{エラー}が起こってしまったのかは、判らない。

だが、歪^{エラー}の結果君は、ここに来てしまった。

だけど、君は本来、この世界に存在してはならない者である。君が存在すること起こってしまう更なる歪^{エラー}が発生してしまった。その歪^{エラー}は、更に歪を増やしてき、行き着く所まで行ってしまった。今更、君の存在を消し去ったとしても、もうどうにもならなくなってしまった・・・

この世界はあと少しで、消滅してしまうだろう。

そして、君の居た世界もどうなるかは、わからない。

無に成るのか存在できるのか？ 神の手を離れてしまった世界がどうなるかは、私でさえ判らない。

神である私は悔しい。

私の存在が何なのか私にも判らなかった。

なぜ、私は神を勤めているのか、ずっと疑問に思っていた。

私の自我は一体どのタイミングで目覚めたのかすら判らない。

勤めていれば、いずれ答えがわかる気がしていたが、無理だった。

┐

神は最後に・・・

「後は君の自由にすればいい」

とだけ言い残し、その場に立ち尽くすのであった。
神への疑問も引き出せるだけ引き出すと、反応はしなくなった。

私は、先に進んだ。

進める場所があつたからだ。

私はその先へと進んだ先で、現実世界へと帰還していた。

自分の居る世界だ。

私は戻れたのだ。

所詮は絵空事で、作り話の世界であるように、私は割りきって日々の生活に戻った。

一週間程経ち一夜明けると、外の騒がしさに気が付いた。

空は、真っ赤に染まっていた。

臭い^{くさ}におい・・・

私は、それが『血』であることに直ぐに気付く事になる。

外を歩けば歩くほど体が血に染まる。

大気の色は、ある一転に集中して濃い色をはなっていた。

私は、そこに向かう。

そこにあつたのは、死体の山だった。

その山は積み上げられ天にも上る高さだ、

1000人、2000人。数えることは、できない。

「40億1342万3133人だよ。。。」

何者かの声がした。

肉眼ではわからない。それに、これは声という感覚ではなかった。これは、まるで、あの世界での感覚にそっくりだった。

わたしが、そう感じた瞬間。

声の主は、笑い始めた。

「君は歪^{エライ}だね。めずらしいな、人間なのに。。。。こんなことがあるんだ」

声は聞こえど姿は見えない。

そう思った時、目の前に、大きな化け物が現れた。

化け物は、まるでRPGの中に登場する化け物とそっくりだった。ビル1つくらいあるう、その化け物は、言う。

「人をただ単に殺すの飽きちゃった。。。」

だから今度は、殺し方を面白くしようと思う。

串刺しか、火あぶりか、釜茹でか・・・」

目の前の現実離れた現象に私は怯えた。。。

怯えて恐怖を感じた。

だが、そうすれば、するほど、その悪魔は楽しそうになっていく。

私は、悪魔に、つかまった。。。

逃げようとあがいた。が奴に力は、まったく通用しない。

悪魔は、わたしの腕をへし折った。

私の絶叫を見て、悪魔は子供のように無邪気に笑っていた。
リアクションが楽しいという感じである。

私は残った足、両腕をへし折られた時、意識を失った・・・

私は生きていた。

夢か幻か判らなかったが、目の前に、その悪魔は居た。

「怖いだろうww 悪魔はやっぱり、この世の存在で一番の恐怖なんだぞ！」

悪魔は私に何を言っているのかわからなかった。

・・・が、直ぐに思い出した。

私は、何度も殺されては、生き返らされ、また、殺されては、生き返らされるというのを繰り返されていた。

悪魔は私の死へのリアクションを研究していたのだ。

私は、自分が、その苦痛を覚えていないのが唯一の救いだと感じた。

と、同時に奴に勝つ方法を考え付いた。そして神が言っていた『世界が滅亡する現象』を回避する方法も判った。
その方法は・・・

〈問題〉

読者の君は、どうやってこの世界を救いますか？
あるいは悪魔に勝ちますか？

正解は一つではなく複数あります。

答えは現実的でリアルあるのを正解とします。

ちなみに答えが判らない人は作者と比べて推理力も想像力も無いという証明になります。

答えが判った人はメールください。

正解に近ければ折り返し正解が書かれたメールを送り返します。

うんこ

34歳、派遣会社社員の運子（仮名）は自分の体質に悩んでいたそれはウンコを食う程に運が良くなるらしい事だ。

それも、ホームレスのおじちゃんのクツサイうんこでしか効果が得られない様なのだ…

運子『あの…婚姻届もつてきました…』

ホームレス『うひほ！ちゃんと判も押してある！』

運子『あの…約束通り毎日うんこ食べさせてくださいね…』

ホームレス『そんじゃあ約束通り今夜からねえちゃんの部屋に住まわせてもらっぜ！』

運子『ぐすん…（泣）分かってます…グスッ』

ホームレス『それじゃあ今日もデカイの一発ヒリダスぜえ！』

運子『ひっ…』

運子の業績は伸びに伸び、ついに念願の正社員に昇格する事が出来たのだった…

運子『あの…もう…』

運子はもうウンコは食べたく無い旨を元ホームレスの夫に話した、すると…

夫『なんだって？ふざけんな！ウンコ食えないのなら離婚だ！』

運子『そっそんなあ！酷いです』

夫『うるせえ！毎日おれの糞でもくつてろ！嫌なら離婚だ！』
運子『…今日お弁当の中身見られそうになったのよ…臭いだ
つてあるしもう隠し通せないわ！もう嫌なのおお！』

芝 潤一郎（無職・童貞）は暇だった・・・死ぬほど
暇で毎日親の金でゲーセン行ったり朝まで賭け麻雀を
やったり風俗にハマり過ぎて借金まみれ」だった…

この日、親に勘当された芝はぶらぶらと秋葉原の町を
焦点の定まらないマグロの腐った様な瞳をして彷徨つ
ていた…覚せい剤を常用してそうな顔をしていたため
おまわりに職務質問された。

署に任意同行させられて尿検査の途中で逃げ出してき
た芝、隠れた路地裏で犬の糞を食っている女を見た…

運子『！』

芝『！』

芝は呆然とした…それは一眼惚れだった。食ってる糞
等は問題ではない！

運子『…どうしたの？ウンコ食う女はそんなにキモイ？』

芝『いや…ぜんっぜん』

運子『嘘だ！』

大好きなゲームのヒロインと同じ台詞を聞かされて思わず
ドッキッとしてしまう芝、芝はアニオタだった。

その場で芝は運子を口説いた…

運子『私…×１だし…ウンコ食べるけど…』

芝『いいよ、ありのままの君でいいんだ』
運子『うん・・・ありがと』
二人は抱き合っていた

やすお君と隣のお姉さん？

「うう。うう。うう」

「うるさい子だねえ！バカ！」

やすお（３歳）は、立たされていた。ごはん時である。母親は、松阪牛のサーロインステーキをむしゃむしゃ食っている。

「おなかへったよう」

「うるさい！働いてないくせに！」

母親は犬のエサ受け皿にドッグフードを盛った。

「あ。おいしそう！」

やすおは目を輝かせた。

そして、ひざまずき、ドッグフードをがつついた。

母親はやすおの顔を蹴飛ばした。

やすおの鼻から大量の血。

「だれが食べていいつつた！三回回ってわんしてよしと言ったら食べるんだろうが！」

母親はドッグフードをゴミ箱に捨てた。

「お前はベランダに出ておれ！」

「ふえええん」

やすおは真冬の寒い夜、ベランダに追い出されてしまった。母親はベランダの窓の鍵を閉め、そのままグースカグースカ寝た。

やすおは野獣のような母のいびきを窓越しに聞きながら悲しくて悲しくてならない。

夜空を見上げる。満天の星だ。きれいだなあ。

いやなことが忘れられる。とてもいいなあ。

「ぐうううう」

でも腹へる。うううう。寒いよう。寒いよう。

その時、突然、お隣からにゅっと顔が出た。

「ひゃっおねえさん、誰！」

「ロリ華だよ」

隣のおねえさんは、やすおに、「ほい」と、んまい棒を差し出した。
「わっんまい棒だ！」

やすおは、「食べていい？」とも聞かずに、おねえさんからんまい棒を奪い取り、がっがつ食った。

「まだあるよ」

「やったー」

やすおは、そんな調子でなんと20本もんまい棒を食ってしまった。

「げっぶ。腹いっぱい」

「ちよつとよじ登ってこっちおいでよ」

「えっいいいの？」

「いいよ」

窓からおねえさんの部屋に入るやすお。

「うおお。これが女の人の部屋かああ」

やすおは三歳ながら興奮してきた。ベッドの上にくまのプーさんのぬいぐるみ。カーテンはピンク色。本棚を見ると少女漫画。全体的にきれいにしてある。壁にはアイドルのポスター。いかにも女子って感じ！

「へえ。へえ。へえ」

やすおはきよろきよろ部屋を見渡した。

思わず、タンスを引いてしまった。

「パンツいっぱい！」

黒やらピンクやらセクシーなパンティを前に、やすおは何だかテンションが上がってしまい、パンツを頭から被り、両手を上に上げ腰を振りながら、変な踊りを踊ってしまった。

「やつほーい。やつほーい。やつほほほーい」

しかし、やすおは気づいてしまった。おねえさんの悲しそうな視線に。

「あの。その。これはそのう」

「いいのよ。さびしかったんだよね。君。お母さんにいじめられて
つらかったんだよね」

「うん。そう。ぼくつらかったの。さびしかったの。そうそう。さ
びしかったの。変態なわけじゃないの」

「うう。かわいそう。おねえさんと一緒に寝よう」

「いいの！」

やすおは大興奮。おねえさんは見るところ、20代前半。顔はロリ
顔。しかも、ボイン。パジャマ姿がまぶしい。シャンプーの匂いが
何ともいえず興奮する。

やすおは、くまのプーさんのぬいぐるみを蹴飛ばした。「痛い！」
そして、おねえさんとピンクの布団の中に入った。

「ママあ。ママあ」

やすおはおねえさんのおっぱいを触った。鼻血が少し出そうだった。

「あらあら。甘えん坊さんねえ。くすぐりたい。ああん」

「もうがまんできん！」

やすおはズボンとパンツを脱いだ。完全に勃起してる！

「うおおおおおおおおお」

「いやあああああああああ」

「む。やすお！」隣から聞こえるやすおの絶叫で母親が起き、お隣
のドアを蹴飛ばした。

中に飛び込み、びっくり。下半身勃起丸出しのやすおが、「やめて
ー！おねがいー！」といやがるおねえさんを無理矢理ベッドに押し
倒そうとしていたのだ。くまのプーさんがほうきでやすおの背中を
ばんばん叩いている。「ぐへへへ。ええやんけ。ええやんけ」

「おのれ。このくそがき」母親は、近くにあった炊飯器を持ち上げ、
やすおの頭に落とした。「うぎゃあああああああああああ」

やすおが気づくと、ベランダにいた。「うう。寒い。腹へったなあ」
やすおはひざを曲げて眠った。月が苦笑いしていた。

お
し
ま
い

やすお君と隣の鈴木さん

今日も今日とて虐待を受ける少年が居る。

少年の名はヤスオ。6歳。

今日も母親の提示する体罰を受け入れベランダに放り出される。

少年が住んでいるのはマンションの3階の角部屋である。

通りからは見上げても少年の姿は見えない位置であり少年に気が付く者はいない。

だが、そもそも少年は助け自体を求めない。

なぜなら長い時間の暴力に耐える事で免疫が出来てしまっているのである。

耐えるのが当たり前だと認識していて仕事だと思っているのである。そして何より仕事をした分だけの見返りが得られるからこそ耐えられるのである。

昔は何度か保護団体が家に押しかけてきたこともあった。

だが仕事を奪われることに恐怖する少年は断固として虐待の事実を認めない。

そういう経緯もあって親も虐待に対する世間の目に敏感になるのであるが、

その虐待行為も、ますます巧妙化するのであった。

殴るときは風呂場でシャワーを流しながら、その音を掻き消すのである。

もはや隣人でさえも虐待の事実には気が付くことはない。

壁越しに耳を当て澄ます等でもない限り虐待は世間にはバレナイ

のである。

そうして今日も少年は、いつもの様にベランダで時間を潰す仕事をしているのである。

今日は寒いな・・・

でも、もうちょっと我慢すれば、ご飯を食べさせてもらえる。ママの笑顔も、ちょっとだけ見れるかもしれない・・・

少年は、いつもの様にベランダで我慢をしていたら、ベランダの端っこにゲームが落ちているのを発見した。

少年に疑問が生まれる、

だが、子供であるから深くは考えることはない。
そのゲームは少年が欲しかったゲームであった。
夢中になって少年はゲームで遊ぶ。

「このゲーム面白い？」

どこからとも無く声が聞こえる。

少年が、声の方向を見ると大きな顔を見つける。

その顔は隣の住人のベランダから、によきによき生えている。

そのニヨキニヨキと生えた顔は言う。

「それ僕のゲームなんだけど面白い？」

少年は一瞬、驚くも、ゲームをくれた人だと直ぐに理解し感謝の意を示す。

「部屋に戻る時は、そのゲームを返してね。」

「明日、また、貸してあげるよ・・・」

「でも、その代わり、このことは親には絶対言っちゃ駄目だよ。またゲームが親に見つかってもいけない。」

「約束を守らないとゲームを貸してあげないからね。」

その顔は、少年と約束を交わした後に消えていく。

翌日。

少年はゲームをやりたくて幼稚園から帰るなりベランダへ直行する。ベランダから顔が生えてくるのを期待して待つこと1分・・・

顔がニヨキと現れてゲームを貸してくれる。

そして顔は新たにイヤホンなるものを貸してくれる。

「このイヤホンなら周りにゲームの音が聞こえることはないよ。」

「押入れの中でゲームをすると、ママにバレナイよ。」

そう言っ顔は、少年にアドバイスをして消えていく。

そうしてゲームを返す貸すのやり取りが、毎日のように続くのである。

った。

ゲームは常に新しい物へと変わり、少年の好奇心を満たし続けた。

少年が小学校に入学してしばらく時間が経った頃。

ベランダに現れる顔は、新しいことを提案する。

「こっちの部屋に遊びに来るかい？」

少年は躊躇もせず、お隣さん家におじやまするのであった・・・

お隣さんの家の玄関先にて背伸びをする様にとチャイムを鳴らす少年。

おもむろにドアが開き鈴木さんが手招きをしている。少年は玄関先で靴を脱ぎ揃える。それを確認した鈴木さんは少年を奥へと誘導する。

「お邪魔します」と挨拶をして部屋に入る。

台所を抜けて鈴木さんの先導で連れていかれた奥の部屋で少年は視線を忙しくし、いろいろな所を見ている。

驚くのも無理はない。部屋にあるのは少年の興味をそそるであろうプラモデルやら玩具、ゲームが選り取りみどりの様にあるのだ。少年にとっては、この部屋は羨ましいと思ってしまうのである。

「うわゝ何これ？」

少年が、まず興味を引いたのはロボットのプラモデルである。

「これ触ってもいいかな？」

少年は鈴木さんに了解を求める。

鈴木さんはベットのの上に腰掛けると少年を見ながら手を差し向ける。

どうぞという合図だろう、その鈴木さんの合図に少年は嬉しそうにプラモデルを触る。その少年の後姿を鈴木さんは、まじまじと眺めていた。

その後、少年は鈴木さんとゲームをして楽しみ、日が暮れていった。

時計の針は6時近くを回り少年は門限の時間になり家に帰る。

その帰る少年の後姿を惜しそうに眺める鈴木。

玄関先で靴を履き出て行く少年の姿を最後まで眺めているのだった少年は、その日からというものの学校から帰るやランドセルを置き、隣りさんの家に遊びに行くのだった。鈴木さんの家からは何時も少年の絶え間ない笑い声が聞こえた……

—————

お隣さん家は、とても凄かった。

何が凄いかというと、ロボットの玩具とかゲームとか、いっぱいあって、とにかく凄いなだ。

鈴木さんはとても優しく僕に何でも教えてくれる。

お菓子もおごってくれる。

僕は、鈴木さんと、とても仲良くなり、気付くと毎日遊びに行った。

そして兄弟になった。

「お兄ちゃん！ 今日も遊びに来たよ」

それから約一ヶ月後、この頃から、母親の帰りが遅くなり始めた。
「早く帰ってこないかな。お腹すいたよ」

最初は、予定より少し遅くなる程度だった。

それが次第に、そして当たり前の様になり、食卓には予めスーパ
ーで買った弁当が置いてある様になり、母はやすおと一緒に食事も
取らなくなった。

母親には男が出来て、やすおが寝る時間になっても帰らなくなり、
朝帰りもしばしば起こる様になる。

毎日食べていた弁当も用意されなくなり500円玉が置かれるだ
けであり、もはや育児放棄とも呼べるものになった。それは更にエ
スカレートしていき2日続けて帰らないという事も起きた。やすお
が自分で買い物して自分で食事が出来ると母親は理解したのであ
る。

やすおは寂しさのストレスでオネショをする様になるのだが、そ
んなやすおの気持ちを理解できない母は、いつもの様にしかりつけ
て罰を与えるのだった……

少年のその様子を知った鈴木さん、貴方ならどうさせる？

〔選択肢〕

鈴木さんは、どうする？

A 泊める

B ほっとく

――――
B ほっとくを選んだ場合

やすおは、今日も母の帰りを待っていた。

と、その時、玄関のチャイムが鳴る。

今日は早い帰りの様で、玄関口へと歩み寄る。

ところが玄関を開けて入って来たのは黒い覆面を被った男たち……
手にはナイフを持っている。強盗だ！

少年の命運は、ここで尽きた……

――――

A 泊めるを選んだ場合

「どうせ今晚もお母さん帰ってこないのなら、私のところに泊まるか？」

そう切り出した鈴木。

少年は一人で寂しい一夜を過ごすのは怖かったので、それは願ってもない提案だった。「泊まってもいい……の？」

「その代わり皆には内緒だよ」

やすおの母親は毎日家に帰っては来るものの、その時間は、やすおが昼学校へ行っている時間で顔を合わす事は無くなっていた。

母親は500円玉を台所のテーブルに置くだけであり、いつ帰るかというメッセージすら残さなくなっていた。外泊する場合も最初は電話で事前に連絡が入っていたのだが、それも次第に無くなっていた。

母にとつては昼間に部屋に帰り前日に置いた500円が無くなっているのを確認するだけで事足りたのである。

隣の鈴木さんに甘えられる嬉しさ、一緒に楽しく、ご飯が食べられる嬉しさ、夜更かし遊び放題。やすおにとつては期待に胸を膨らます日となるのだった……

その日は、少年にとって期待通り楽しい日となった。

鈴木さんに甘え夜遅くまでゲームをし、おいしい、お菓子を食べさせてもらい。一緒の部屋に寝られた。もう、夜一人でお化けに怖がる必要も無いのである。

けれど康夫君はオネシヨをしてしまった。

オネシヨをした事が見つかったから怒られると学んでいた康夫は、一人、洗面所で小さな明かり元で汚したシーツとパンツを洗っていた。怯える様に必死で……

怒られる！怒られる！怒られる！怒られる！怒られる！
怒られる！怒られる！怒られる！怒られる！怒られる！
怒られる！怒られる！怒られる！怒られる！怒られる！
怒られる！怒られる！怒られる！怒られる！怒られる！

鈴木さんに怒られる……
怖いよ……怖いよ……

深夜4時、鈴木は物音に目を覚ます。
音の聞こえる方は台所の先の洗面所の方、眠い目を擦りながら彼は、その方向へ歩く。
聞こえているのは水の流れる音。
音の先で誰かと目が会う鈴木。
半べそをかいている少年がそこ居た。

ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！
ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！
ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！
ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！

連呼して極度に怯えるやすお。

やすおは必死に謝っている。

鈴木は少年を抱きしめた後で、優しく頭を撫でた。

「大丈夫」と呼びかけて彼は、やすおを安心させ様とする。

「でも……」と、やすおは洗面所に放置された自分のパンツを見て

眩く。

やすおは、怒られない事に戸惑いも抱きながらも、やはりこれは自分の仕事という思から居ても立ってもいられない。

「心配するな。後は私がやっておく」そう言つて鈴木は、やすおのパンツを手に取り洗い始める。

その光景を申し訳無さそうにじっと見つめる少年の姿に鈴木は言つた。

「安心なさい、私はママじゃなくて君のお兄ちゃんだ」

この言葉に安心したのか、納得したのか、しばし、2人の間に静かな沈黙が続く。水の流れる音が部屋に響き渡りながら……

「いっしょの布団で寝ようか？」そう切り出す鈴木

「え？」ビックリした様子のやすお。

「一人で寝るの怖かったよな」

「でも……僕、オシッコくさいよ。お兄ちゃんの布団も汚しちゃうかも」

「実はお兄ちゃんも一人で寝るの怖いんだ」

僕は、お兄ちゃんの言っていることが理解できなかった。
だってママでさえオネシヨした僕にそんな事を言ってはくれない。
うれしい。そう言ってくれた、お兄ちゃんが僕は好きだ。

僕はお兄ちゃんのと一緒の布団の中で深い眠りの中へと落ちてい
く。

お兄ちゃんの優しさと温もりを感じながら……

さて、この後、やすおと鈴木 of 運命はどうなるでしょうか？

気になる鈴木 of 正体。悪い奴ではなさそうだが、もしかしたら危ないかもしれない。

どこがどう危ないかは、この際、読者の妄想に任せるとして、実は作者は、この先の話を作ってません。

いや・・・一応、作っているのだが・・・

例えば、鈴木が・・・

けれど、鈴木 of 正体がわかった時点で、この物語はピークを迎えちゃうわけ。

どんなに鈴木 of シーンを描いても、それ系の人達にしか共感はないし、それ系 of 人口少ないし、こういう人も居るんだよって視聴者に知らしメタところで、それ系 of 人が救われる訳でもない。

これは、あくまで、やすお君という悲壮感な人生を歩む者を同情し見て読者に、子育や福祉 of 何たるかを考えて貰うのが意味深いものである訳だ。

だが、よくよく考えると、この手 of 不幸話は探せば一杯ある。

例えば、虐待事件で、ダンスに入れられ死ぬ。生ゴミ食ってなんとか生き抜いた子供。

アフリカ、アジア諸国 of 恵まれない子供達。

やすお君なんて、それと比べたら、まだまだ、幸せ者であるし、皆もそう思うでしょ。

、こうやって、モニターの前で踏ん反りかえって、これを眺めてる私たちがいかに、恵まれてるか判るかと思いませんか？

そして、自分の事ばかり考えて、日々をなげいてみたり、血液型占

いを信用して一揆一致してみたり、男女のチヨメチヨメばかり夢見るのが、きつと恥ずかしく思える筈です。

したらば、まずは募金あるのみです。

こちらでどうぞ。

ユニセフ
<http://www.unicef.or.jp/?as|grant>

なんてね♪ 自分の事ばかり考えてる人が、シリアスな話をこんな
トコまで読める筈ないよね。忘れちゃってください。

ましてや無料小説読むくらいだから、そんな金持ちでもないだろう
し、きつと募金とか無理なんですよ。

私だって、同類で募金とかしないし不甲斐ないし甲斐性なしで、実
に申し訳ない。

でもまあ、あるトコにはある訳で・・・その君！

もし、君が金持ちなら、ある意味で「なるう」おいては非国民です。
ここに来る資格はない！

さつさと、どうか行けーーーーー！！！！

と・・・ごはんライスなら言うでしょう。

この物語は、これ以上、先に進めても意義が無いので終わるのが良
いのであるが、もしかしたら、一部の人は、この先の話を必要とす
るかもしれないし、しないかもしれないので一応、続ける事とする。
ただし、ミステリーとして終わりを告げ、一般的な人にとって退屈
となるだろう、

だから、簡単に物語の要約を書いておく・・・

A 20x20 grid of dots. The dots are arranged in a regular pattern, with some dots replaced by vertical bars. The vertical bars are located at the following coordinates (row, column): (1, 10), (1, 19), (2, 10), (2, 19), (3, 10), (3, 19), (4, 10), (4, 19), (5, 10), (5, 19), (6, 10), (6, 19), (7, 10), (7, 19), (8, 10), (8, 19), (9, 10), (9, 19), (10, 10), (10, 19), (11, 10), (11, 19), (12, 10), (12, 19), (13, 10), (13, 19), (14, 10), (14, 19), (15, 10), (15, 19), (16, 10), (16, 19), (17, 10), (17, 19), (18, 10), (18, 19), (19, 10), (19, 19). The dots are arranged in a regular pattern, with some dots replaced by vertical bars. The vertical bars are located at the following coordinates (row, column): (1, 10), (1, 19), (2, 10), (2, 19), (3, 10), (3, 19), (4, 10), (4, 19), (5, 10), (5, 19), (6, 10), (6, 19), (7, 10), (7, 19), (8, 10), (8, 19), (9, 10), (9, 19), (10, 10), (10, 19), (11, 10), (11, 19), (12, 10), (12, 19), (13, 10), (13, 19), (14, 10), (14, 19), (15, 10), (15, 19), (16, 10), (16, 19), (17, 10), (17, 19), (18, 10), (18, 19), (19, 10), (19, 19).

モールス信号で書きました

やすお君と隣の鈴木さん（後書き）

後書き、

「モールス信号で書きました」と、モールス信号の後に書くのと、モールス信号前に「モールス信号で書きます！」と書くのとどっちが、面白いだろうか？

何か、大きな違いがある気がしてならない・・・

でも、どうせ嘘だし、モールス信号にはなってますからねw
え？ 信じる訳がない？

でも、信じた人は凄い！ とても素直！
ぜひ、友達に成りたい！！

くおまけ 500円玉と母親く

500円玉での繋がりではない母親であるが彼女も親としての自覚があるからこそ500円玉を置くのが日課と成っている。

ある晩、母は男に連れられて私物を取りに部屋に帰って来るのだが、やすおの姿が見えない事に気付く。そして500円玉も使われずに残っていることを知る。

いない？

やすおが？

何で？？？何で？？？何で？？？何で？？？何で？？？
何で？？？

まさか、誘拐？

いや、考えすぎだな。

誰か友達の家泊まっているのか？

でも、だとしたら携帯に連絡があるだろうし・・・

だが、直ぐにやすおは返って来る。

お隣さん家から母親が自宅に帰って事は足音で判ったのだろう。
母に甘えたいやすおは、一目散に自宅へと飛び帰る。

だが、母にとっては、疑問である。こんな遅くまで何をしてたのか聞いたです。

親としての心配もあるかもしれない。あるいは人様に迷惑をかけたかどうかの心配かもしれない。だからこそその追及。どこでどうしているのか。何を食べたのか。母は疑問に感じざる終えないからその行動。だがそれは、やすおにとっては恐怖の追及でしかなかった。

恐怖に耐えられなくなった、やすおは、追求に負けてまう。もう、お隣さん家に行っただけとはいけないという事を強制された康夫は泣き出してしまった。

母は、やすおが泣く理由が判らない。やすおを叱る事は母にとっては日常の行為で、泣かれるとは思ってもよらなかった。

母にとっては、やすおが鈴木さんを必要不可欠としている理由など考えもしていない

「もう！　なんで泣いちゃうの？　メンドクサイ！！　いつもならこんな事で泣かないでしょうが！」

母の声も、やすおの泣き声でかき消される。その声は隣の鈴木の子供の部屋にも響いていた……………

—————

貴方が、もし鈴木さんならどうする？

〈選択肢〉

A 何もしない傍観する

B 助けに入り、生意気に発言する。

C 助けに入り、マイルドに発言する

――――
「A 何もしないで傍観するを選んだ場合」

やすおの泣き叫ぶ声が壁を通して聞こえてくる。
その声は次第に聞こえなくなり、耳を済ましても聞こえない。
その夜を境に、康夫は鈴木の家へ来なくなった。

おわり

――――
「C 助けに入り、マイルドに発言する」

玄関のチャイム音が鳴り、母親、鈴木が顔を合わせた。2人は、
これまですれ違う程度にしか顔を見たことはなく初対面に近い
先に言葉を発したのは鈴木。

「隣の鈴木と言いますが……大丈夫でしょうか？」

「……」

キョトンとする康夫母

「私、いつも暇してるので、宜しければ、やすお君の面倒を見させ
えいただきますよ。」

「そ……そうですか」

「はい」

「・・・では、その時がありましたら・・・」

康夫母は鈴木に警戒しながらも、当たり障り無く鈴木に干渉しない様勤めた。

母にとつては、あくまで他人で信用できない。

やすおの口から虐待の真実が漏れるのも怖いし、情け掛けられて出来ない親と思われるのも悔しい。

だが、隣に自宅が監視されていると気付いた母は、やすおを泣き止ます為に鈴木の家への出入りを承諾するしかなかった。もちろん泊まる事の内容はなしで。

半端おわり

（B 助けに入り、生意気に発言する。）

玄関のチャイム音が鳴り、母親、鈴木が顔を合わせた。2人は、これまですれ違う程度にしか顔を見たことはなく初対面に近い

先に言葉を発したのは鈴木。

「やすお君を泣かさないで下さい」

「は？」

キョトンとする康夫母

「もっと、教育するにしても優しく接するとかあるんじゃないでしょうか」

「どうして鈴木さんにそんな事を言われなくちゃならないのでしょうか？」

「・・・」

「鈴木さんはどういっつもりなんですか？　ウチの子を・・・親である私の許可無く家に泊まらせるなんて・・・　聴けば、お宅さんの家に何度もウチの子が入りしているそうじゃありませんか。その事実を、どうして私が知らないのでしょうか？」

「ですぎた真似をしたとは思っております。泊めるなら一言、連絡するのも筋とも思いました。ですが、お宅に許可を取る事が果たして可能だったかどうか疑問です。失礼ですが、貴方。育児放棄、もしくは虐待をしているでしょう！　子供に500円を与えるだけで育児を済まそうと考える者に、外からの援助が肯定的に受け取れたでしょうか。余計な御世話、あるいは情けを掛けられたかの様悲観し拒否し、目を背ける。そして、そのストレスのはけ口は子供に行くでしょう」

〈母親目線〉

彼の非常識に態度に私はイラツキながらも、彼の言う事に反論できなかった。

私が無茶苦茶して生きているのは理解していたし自覚していた。でも、こんな情なくて弱い自分を認めたくない。

だって、これまで長い時間、この子を育ててきたし、育っている。虐待、体罰……いけない事していると判りつつも抑制できない。私には好きな人が居て、一緒に成りたくて、でも、その人は子供が嫌いだから、私にとっては子供は、やっぱり邪魔なのかもしれない。

親として失格と言われたら反論しようがない。

だけど悔しい。

私が今まで頑張ってきた事は、誰も認めてくれない。母さんだって、私を認めてくれない。

私から絞り出した言葉は――

「子供育てたこと無い人にわかる筈ないわよ！」

結局、私は反論しかできない。

そりゃそうだ。目の前に居るこの訳もわからない男に、私の思いを丸裸にされた様な気分で、悔しさ、切なさ、恥かしさ、怒りでどうにか頑張ってしまえそうだ。

気が付けば、近所の住民に私の怒鳴り声が届いている。

私は悪いお母さん。こんな私は、あの子に必要ない。どうせ不幸にするだけだ。

ならいつそのこと、あの子を捨ててしまえばいい。

「あなたはもう、私の家の子ではありません！」

こんな最低な言葉、言いたくなかったのに……

だけど、そう言っで、私は家から、あの子を追い出した。

あの子が持っている合鍵を取り上げて玄関に鍵を掛けて家に入れなくした。

そして私は、その場から逃げるように彼の元へ向かうのだった……

〳数日後の母目線〵

私は康夫になんてヒドイことを言ってしまったんだ。

親として失格だ。

畜生。

人としても失格だ。

もう、どうでもいいや。

結局、母さんの言う通りだ。

女で一つで一人で育てるなんて無理

じゃあ、お隣さんはどうなる？

私より、お隣さんのほうがいいわけ？

くやしい。

取られたみたいでなんかくやしい。

取られた？

違う！。

自分から捨てた！

愚かだな・・・

捨てた物は、とりかえすとは言わない。

とりかえせない。

どうしたらいい？

やすお思い出さずには居られない。

やっぱり母親だから？

でも、今更、どの面下げて、あの子に会つと言つのか？

あんな酷い事言ってしまったのに・・・

ネルネル神「バッドエンド！！ 母親は後悔しているので、後に引き取りに来る事もある。だが、根本は何も解決していない。なぜなら母親は男を見限る理由が無い。子供が居るのが分かっていて蔑ろにさせる様なクズ男・・・こんなクズな男を好きになった母は、はつきり言つて、どんなクズ男でも恋愛対象となってしまうだろう。この男の関係が終わっても、別の男に愛、恋、性を求めてしまい呪縛から逃れられない。どのみち、やすお君を蔑ろにするだろう。この母は、完全に脳の何処かがオカシイ！ ので、丸ごと人格を変えてしまう他無い。とりあえず、男を求めている妄想みたいな欲を完全に消去してしまおうと思う。」

そういつてネルネル神は、踊り出し、呪文を唱え始めた。
マハリクマハリタヤンバリヤ~~~~ン！！

ハッピーエンドの世界に今、変わった！

ネルネル神「これで、このクズ男の存在は消えたなり〜！！後
は、成り行きに任せてれば上手く行くはずさ〜！！ 作者さんにバ
トンタッチ！

畜生！

勝手に物語りに登場してくれてんじゃねえ！
ってか、ここから、どうするよ。

神様居る限り、物語の辻褄や理屈なんか抜きで好きな設定に無理や
りできるんだから、話を強制終了していいんじゃないの？

というわけで・・・

あ。そうだ！ 作者としては、あのシーンを書きたいんだけど、ネ
ルネル神だめか？

「あのシーンは心理的、論理的に物理的に無理だから、世の中の仕組みを丸ごと変えなきゃならないよ。そこまでして何で書きたいの？」

俺さ、7 g b 9 8 ば v r c c f v k なんだ！！

「わかったよ。君がそこまで、言うなら辻褄が合わない物語が成立する世界に変えちゃおう」

そう言ってネルネル神は、また踊り出し、呪文を唱え始めた。
チャーーーーーーーハンたべたい~~~~~~~~

今、読者は呆れて、このページを閉じました。

B a d E n d ! !

作者の守護霊マイケルジャクソンは→の動画を見ていた。

真っ裸で見えます。すっぱんぽんです。

興奮すると彼は脱ぐ癖があるのですが、まあ、所詮は幽霊なので誰にも見えません。誰も気にしない。気になるのは私だけが・・・

目の前でマイケル君が腰を振りながら踊り始めた
ブラブラしたものを見せ付けられる主人公兼作者

こういう時、マイケル君のファンはどう思うだろうか・・・

「守護霊がマイケルでウラヤマシー！」ならまだいいが「なんで寿司なんだ？ 寿司を殺すから俺のトコ来い！」等と嫉妬や憎悪の眼差なら困る。

誤解しないで欲しいのだがマイケル君は作者の事が好き一緒に居る訳ではないのだ。この件については長くなるので語りたく無いのだが、まあ要約するとマイケル君は勘違い主人公兼作者に取り付いたのだ。

しかし勘違いといえど取り付いた責任を途中で放棄するのは武士道の道に反するとかで良く無いらしく、一応最後まで面倒を見てくれるらしいのだ。優しいね。

でも、マイケル君も所詮は普通の守護霊だし、大して役に立たないから、別に居ても居なくてもどちらも良いのだけだね・・・

くおまけ スラムダンクでファンフィクションく

http://www.youtube.com/watch?v=-NrGEHIbIE&playnext_from=TL&videos=eFQru3-3UmC

花道は→の動画を見た。

「うおおおお！」

興奮中

「すっすげえ！」

興奮中

「こ、こんなのが出来たらハル子さんも俺のことを・・・」

デレ顔の花道を隣で見ていたゴリ。

ゴリの鉄拳が飛んで来る。

血がどば――――！！

ぴーぽーぽーぽー
うーうーうーうー

花道 i n 救急車
花道 i n 手術台
花道 i n 棺おけ
ゴリ i n 刑務所

打ち所が悪くて花道は死んだ。
その亡骸に部活メンバーが語り泣き
A「あほ q d ; i r ん ヴ い お w ; ヴ あ j」
B「あほ r v の q f ; q j v c ; え l m」
C「あほの え c ん q ; お j r ; v ; え w」

泣き声で声が聞き取れない。

一方その頃、花道は花道にいた。いわゆる三途の川の花畑という場所だ。

その先を抜けていく花道の姿の設定は、すっぱんぼん。

と突然、全てのお花畑が燃え始めた。

花道は走らなければイケナイ。

何処へとも無く走り続ける。

その先にホールインワン。
実は、棺おけに入ってる時点では、まだ花道の息がありました。
要するに仮死状態でした。残念。

突然ですが花道は閻魔の前に居た。

閻魔は言う

「お前は、沢山の人を苛めたから地獄に落ちろ」

「な！　なんだと！？　完璧なこの天才たる桜木花道がか？」

ふざけると言わんばかりに花道は閻魔の首を絞めた。

閻魔死す。弱すぎた。

地獄の門が開放されて沢山の悪が天国へと侵入。

殺戮。幼児虐待、婦女暴行。

天国の住人は皆、地獄へと追いやられた。

流石の花道にもこれには責任を感じて自害しようとする。

しかし、天国のパパがそれを止めに入る。感傷に浸るよ。

一方その頃、天国のB地区とC地区は、事の重大さを把握。悪に占領された天国へと猛攻撃を仕掛けた。

だが、地獄の過酷な環境で鍛えてきた悪人の力は善人の数千倍。

あっという間に天国は壊滅。

この状況で、この先、どうして良いか分からない作者は連載を打ち切る事に決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4410m/>

小説NO 4410 = ししとう = ししとう！！ ししとう = ししとう！！ <http://w>

2010年10月9日14時29分発行